

友の会 通信

2007.10
No.83
ASSOCIATES NEWS
THE MUSEUM OF ORIENTAL CERAMICS, OSAKA

風塵往来 11

我田引水の説になるが、東洋陶磁美術館で陳列されると、ものがよく見える、と言われる。たとえ偽物であっても本物に見えそうだ、と言われることすらある。それには、いくつかの要因がある。

第1に、ケースの作りと配置。一般に美術館のギャラリーは、展示作品の多様性を考えて、背の高いガラス・ケースを壁一面に張り廻らしたような「連続式ケース」が採用されることが多い。当館の場合、陶磁器専用のそろ背の高くないケースを、適当な間隔を置いて壁の中に組み入れた「分割式ケース」である。長いケースにすらすらと画的に並べられるより、少しづづ纏まりを持つたケースの中で調和と対照を見せながら展示される方が、作品の個性が発揮されるのは当然のことだろう。それにこの制約の多さうな分割式陳列が、どのような規模内容の展覧会にもぴたりと適応するのが不思議である。制約のない平地より、三角地や傾斜地に設計するほうが面白いと、建築家がよく言うのと同じ事情であると思う。

第二に、ライティング。ケース内全体に蛍光灯による弱い照明があり、作品一点ずつに前方上部から調光式のハロゲン・ライトを当てている。さらに引き立てられて、明るくよく見えるのだ、と思う。

第三に、ディスプレイの工夫。当館ではケースの幅がそう広くなく、一つの展示空間に点あるいは二～三点なり、三～四点なりに組み合わされた少數の作品展示にせざるを得ない。ところが、この小規模の展示グループを作ることに展示全体のリズムを生じさせる鍵があるようである。仮に百点の作品を陳列する場合でも、細かく因数分解をしながら、作品のグループピング作業を行っていく。大まかな陶磁の種別・技法別分類を行つた上で、器形、大きさ、文様、釉色などを勘案して、慎重に取り合わせを決める。その場合、品等別という視点にも注意を向けるのが味噌である。A級の作品群の中には、一点C級品が入るだけで、そのグループはC級になってしまふ。作品と作品の取り合せにこそ、展示の成否の秘密が隠されている。要所要所に、見せ場を作つてアクトセントをつけて、慎重に取り合わせを決める。その場合は、調整を加えていく。かくして、作品はそれぞれの最高の顔を見せることとなり、展示空間は音楽の譜律にも似た快適さを備えることになるのである。

(館長 伊藤郁太郎)

展示室から

九州国立博物館「朝鮮時代の白磁」展

平成17年10月16日にオープンした九州国立博物館の文化交流展示室には、「韓国陶磁の色とかたち」という1室に、当館所蔵の韓国陶磁が展示されています。初回の「鶏龍山のやきもの—鉄絵粉青の世界」を経て、今年の3月より「朝鮮時代の白磁」展が開催されています。

朝鮮時代(1392~1910)には、王や民を問わず白一色の白磁が好まれました。同じころの清朝や江戸では華やかな色絵が好まれたことを考えると、きわめて異色のことです。その理由は、華やかさを嫌い、質実を尊ぶ儒教思想が深く浸透したため、ともされています。また我国では室生犀星、小林秀雄など多くの知識人が朝鮮時代の白磁に魅了され、隨筆などさまざまな文章を残しました。

本展では、各時代を代表する白磁の壺や瓶、文房具など32点を展示していますが、なかでも文豪・



白磁壺
朝鮮時代・17世紀 高45.0cm
Acc.No.21519 (新藤晋海氏寄贈)

志賀直哉旧蔵の白磁壺は、今回の展示の目玉となっています。この壺は、東大寺・觀音院にあった際、盜難にあって粉みじんとなつたまま当館の所蔵となり、奇跡的な修復を経てよみがえったものです。

そのほか会場には、今日の韓国写真界を代表する一人、クー・ボンチャン氏(1953~)の白磁の写真を展示し、伝統美とともに、朝鮮白磁のもつモダンな魅力も含せてご鑑賞いただけます。

(※会期等の詳細情報については九州国立博物館 NTTハローダイヤル:050-5542-8600にお問い合わせください。)

編集後記

※10月から半年間の休館を頂きますが、友の会活動はその間も行う予定です。館よりのお知らせをお見逃しのないよう、ご注意下さい。(S.S.)

ボランティアの怒

◆今回の「安宅英一の眼」展を観て七言律詩を作りました。
觀鐵砂虎鷺文壺 安宅英一眼展作 「韻目 虞」

安公菟輯李朝壺

名品今開澁水闕

虎獨咆哮葦陣懸

鷺徐陽睡蘋花燭

工人侃侃為陶悅

雅客瓢瓢愛此娛
魂魄靜思幽遠美
應看館內溢瓊珠

澁水=澁河=淀川
陽睡=寝たぶりをする
雅客=雅人=風流な人
瓊珠=光輝く珠 (H.K.)

大阪市立東洋陶磁美術館
友の会通信 通巻第83号
2007年10月1日発行 No.23-3(年4回)

編集・発行:大阪市立東洋陶磁美術館友の会事務局
〒530-0005 大阪市 北区中之島1-1-26
TEL.06-6223-0055
http://www.moco.or.jp
デザイン:清嶋滋+studioTWEN 印刷:岡村印刷工業株式会社

休館のお知らせ
平成19年10月1日(月)～平成20年3月31日(月)
当館では地下電気機械室工事のため、半年間休館をいたします。

特別展「美の求道者・安宅英一の眼—安宅コレクション」は
下記の期間、東京、福岡、金沢に巡回をいたします。
(会場の都合により、出品点数は減少します)

◆[東京展]
平成19年10月13日(土)～12月16日(日)
三井記念美術館

◆[福岡展]
平成20年1月5日(土)～2月17日(日)
福岡市美術館

◆[金沢展]
平成20年2月29日(金)～3月20日(祝・木)
金沢21世紀美術館



青花辰砂蓮花文壺
朝鮮時代・18世紀後半
高44.6cm Acc.No.21128 (安宅英一氏寄贈)

今回の特別展開催準備後に、たいへん貴重な文献を発見いたしました。安宅さんが間違いなく書いたという文章のひとつです。音楽関係以外で残されたものはほとんどなく、本当に貴重なもので、『合掌』という題の隨想です。ただ残念なことにどこに発表されたのか、何時発表されたのかということは確認できません。でも、最後に「安宅産業取締役会長」という肩書きがございますので、これから類推をしますと、安宅さんが安宅産業取締役会長に就任されていた昭和30年から昭和40年までの、約十年の間にどこかの新聞に頼まれて書かれたということは、はっきりしています。昭和30年といいますと1955年です。安宅さんは1900年生まれですから55歳から65歳までの文章と思われます。これは安宅コレクションを考えるだけではなくて、安宅さんという人柄を考える上で本当に大事な文章ではないだろうかと私は思います。安宅さんがここで一番いいたかったのは、一番上の段の「どのような格好をするときに、一番我々の心を打つものがあるかと想像してみるに私は『合掌』という姿ではないかと思います。合掌とは、人間がもっとも人間らしいものをあらわした姿だと考えています。」というところです。これは実に重要な指摘です。安宅さんが安宅コレクションを通じて、なにを言いたかったかということは、最終的にはものと人間との関わりであり、しかもその元になる人間の心の問題だらうということ、極めて精神主義的な立場で収集していったということは、これだけの文章を通じても、はっきりします。今回の展覧会のサブタイトルに、「美の求道者」、道を求める人という名前をつけたのも、そういう安宅さんの精神主義的なスタンスというか、ものに対して、人に対して、すべて何か人間の心というものを大事に考えた人であると、これは安宅コレクションを考える上で非常に大きなポイントであると思うわけです。例に挙げているのが、双葉山のことです。相撲の世界を取り上げても、双葉山というのは不世出の横綱で、安宅さんは一流主義だった、名品主義だったというのは、ものだけではなかった。相撲といえば、双葉山なのです。歌舞伎といえば、六代目菊五郎以外にないのです。それぞれの世界で一番のものを狙っていた、というのが安宅さんの姿勢でした。たまたまここには、双葉山のことが書いてありますが、35代の横綱で名横綱です。強い弱いだけではなくて精神的にです、「土俵の上での彼の姿は、立礼、勝負、土俵入という三つ」があって、みんなが騒ぐのは勝負でございますが（69連勝ということで不世出の横綱といわれております）、安宅さんを含めた通人仲間は最高のものは双葉山の立礼であった、土俵ではなくて、おじぎが双葉山の最高のものであったと見ているわけです。何故最高のものかというと、双葉山のわずかな立礼がまさに合掌の姿に通じるものがあるからだ、といっているのです。ここで、紹介したいのは、私は安宅さんに何十年お付き合いしてきましたが、安宅さんほどお辞儀のきれいな人はいなかった、ということです。鮮明な記憶として残っているのですが、決して深すぎはしない、浅すぎもしないで、真心というか人間の心の純粹さが、相手に対する敬意が具体化、具象化した姿が、こうした姿なのだと思う、そういうふうなお辞儀をされるのです。なんのお辞儀をされたら、私が若い女性であったならふらふらとするかもしれないほど、きれいなお辞儀なのです。ずっとそのお辞儀のルーツは、ロンドン生活が長かったから、向うの礼儀作法に適ったお辞儀だとばかり思っていました。この文章を見まして、初めて、それは双葉山の立礼に起因するものだということに気がついたわけです。わずか一揖というのはちょっとしたお辞儀ですね。この中に崇高な美が宿っている、それを彼の実際の勝負よりも高く評価している。土俵入となると双葉山などの土俵入でも、時々呼吸の間に破れがあると見ます。その見方が実際に厳しいです。双葉山の土俵入をこんな風に言った人はあまりいないと思います。土俵入でも双葉山は最高の土俵入をしたと思いますが、その中にも呼吸の間に破れがあると看破している。実に厳しい人です。おおらかなところと、とことんまで厳しいところが同居していた人だと思います。あまり怖いので、今でこそ夢に見なくなりましたけれど、つい何年前までは怒られている夢を見まして、ふと目が覚めるのです。怒るのも大きな声を出さないのです。ただじっと見るだけです。その睨みの怖いこと。それでもひとつ大事な事は、上から三段目で合掌や座禅やおじぎなどの形態が、「いずれも肉体と精神とがもっとも合致し、融合するように深く考案されたものである」と指摘していることです。「適度な弛緩と、適度の緊張との完全な組合せを通して、絶対の安定の境地に達し、「そこに現に自分が持っている全ての能力を活躍させ得る源泉であるのみならず、ときには自分も知らぬ能力以上のものまでが発揮される」と言っていることです。実はこれが大事なのです。たまたま、形と心とが完全に一致したような時に初めて、自分でも予想しなかった力ができるということを看破している。そういう意味で、形と心、形式と内容の完全な一致こそが最高の境地であるということを、いっているわけです。

ここで、面白い挿話があります。私の友人が安宅さんの追悼集に書いているのですが、ある秋の一日、富士山麓の青木ヶ原の樹海の道を安宅さんと一緒に歩いて、秋ですから足元に枯れ枝がたくさん落ちている。安宅さんが私の友人に「その枝をちょっと拾い上げてください」といわれるのです。拾い上げると「そうではなくて、そっと上からつまむように拾い上げてください」といったらしいのです。安宅さんは本当に言葉数の少ない方なので、その前にそのことに絡む話があったわけじゃない、ところがそのときに安宅さんが考えていたのは、ヴァイオリンの奏法のことでした。そっと上から摘み上げるような、その形で弓は持ったほうがいい、と言われたらしいのです。安宅さんの話は全て象徴的です。中村紘子さんというピアニストがいますけれども、中村さんは、ある時ロシアから来たボリショイ・サーカスの切符を渡されて「観ていらっしゃい」、それだけなのです。何のために私はボリショイ・サーカスを観に行かなくてはならないのか、安宅さんはそれについ

て一言も説明されない、当時、中村紘子さんが練習されていたのが、シューマンの「謝肉祭」という曲です。謝肉祭にはたくさん道化師がでできます。ボリショイ・サーカスというのは、世界的に最高の歴史を誇るサーカスの中のサーカスだったので。道化が必ず出てくる、道化というものを一度も観たことのない人が道化についてのピアノを弾くことはできない、というのが安宅さんのスタンスなのです。本物を先ず観なさい、直に観なさい、何かを感じなさい。安宅さんは紘子さんに、とにかくボリショイ・サーカスに行ってなさいという、それだけです。別に道化を観なさいとか言わない、後になって、紘子さんは、なるほど安宅さんという人は、私にシューマンの謝肉祭の道化というものの本質を教えるために、ボリショイ・サーカスに行けといわれたのだ、と気づいた。そういうふうに、シンボリックというかボソンと言って、それで引っかかる人には、もう駄目なのです。そういう意味では実に厳しい人です。青木ヶ原で枯れ枝を一本摘んで見なさい、というその摘み方までじっと見ている。そうじゃなくて、上からそっと拾い上げなさい。それはヴァイオリンの弓をその位置で取るのが一番いいですよ、という暗示だったわけです。しかも、言われたのはヴァイオリニストではなく彫刻家です。彫刻家がヴァイオリンを弾くわけではないけれども、それは彫刻家自身、自分が彫刻をやる上でも大変参考になった、と書いています。安宅さんがいつも言ったことは、品だと、人間でもものでも全ては品がなくてはならない。私なりの言葉を使うと、品といつてもいいし、格といつてもいいし、品格といつてもいい、あるいは器量という言葉があります。人間には器量がある。ものを見て、それをどのように受け取るかというのは、受け取る側にも器量が必要なのです。いくらものが良くても、受け取る側がそこまで達していないと駄目なのです。見えないです。ですから、安宅さんが常に言おうとしたことは、言うことは言いますけれども、それをどのように受け取ってもいいんですよ、いつもそういう態度であったということを、今しみじみと思います。安宅さんが私に教えようとしたことも、収集というものの王道、ということだったと思うのですが、果たして私が王道を行っているかどうかはわかりませんけれども、安宅さんの精神主義、求道者という言葉に表わされている魂の在り方、というのでしょうか、やきものを觀ても、やきものと心の関連、これらは一般的に欧米や中近東には見られない心情です。思想や宗教の相違でもあります。日本には、世界でも独特なやきものへの感情移入がある。それはたとえば、茶の湯文化に特徴的に見られます。虫の音にも、情緒的に耳を傾ける、こうした日本人の独特的美意識が、影響しているのかも知れません。やきものにも、精神的なものを感じるから、やきものが超一級になればなるほど、精神的な内容も超一級なものであるに違いない、それを観て、それを手にすることによって自分でも超一級なものになる、そういう精神構造だったのだろうと思います。求道者としての安宅英一、の姿の一端について触れてみました。

『合掌』 安宅英一

「稚拙な頭で、合掌ということを考えてみます。ここに一人の無頼漢ありとして、どのようなかたち、どのような格好をするときに、一番我々の心をうつものがあるかと想像してみるに私は『合掌』という姿ではないかと思います。合掌とは、人間が、もっとも人間らしいものをあらわした姿だと考えています。例は唐突であります双葉山闘の全盛時代、土俵の上の彼の姿は、立礼、勝負、土俵入という三つに分けてみられましょう。幾十連勝のその勝負はいまでも人間美のひとつの極致を表現したものであります。私は、いや私だけでなく通人仲間は、彼の立礼、わずか一揖の崇高美を、彼の勝負よりも高く評価いたしました。それには、私のいう合掌の姿が結晶しているのであります。土俵入となりますと双葉などの土俵入にも、ところどころ呼吸の間という間に破れがあり、彼のことゆえ、やがて大成はするものと楽しんでおりますうちに、引退してしまいました。おなじ双葉闘のものも真剣な三態のなかにも、おのずから立礼、そして勝負、土俵入と歴然たる段階があるのです。私は合掌こそ、その人の最もすぐれた美しさを、それにあらわすものだと考えています。すぐれた芸術家や、知性人は、しばしば私にそれを見せてくれるのであります。

右手を高くさしあげて、神聖な礼をした当代の梶原は滅びましたが、古の賢哲はさすがに合掌の姿をはじめ、坐禅、おじぎというような形態に、この境地を求め、これを後代に伝えています。これらの形態は、いずれも肉体と精神とが、もっとも合致し、融合するように深く考案されていると思います。それは適度な弛緩と適度な緊張との完全な組合せを通して、絶対の安定の境地に達する形態であります。そこに現に自分が持っているすべての能力を活躍させ得る源泉があるのみならず、ときには自分も知らぬ能力以上のものまでが発揮される源泉となることがあります。

合掌の境地は、もちろん形態から入らねばなりませんまいが、しかし終始、形態にのみこだわるというものではありません。心のうちに手を合せ、という言葉は、これをあらわしています。ケイケンとか、信仰とかいう心は、これを合掌という形態におきかえて、法悦の心境に達し得ることをおしえます。我々は生れ落ちると肉体と心とを与えられます。肉体は食わねばならず、よりよく食うためには経済を追求しなければなりません。しかし、それがために心の追求がおろそかになり勝ちではありませんまい。それとも私自身の稚歩は、あまりにも心の方へよろめき勝ちなのであります。」（掲載紙不明）



「合掌」掲載紙面